集落に自信と誇りを

湖北にようこそ 1

長浜市田根地区地域づくり協議会 代表理事 川西　章則さん（長浜市池奥町）

我々の地域づくりは7年前、ある方との出会いがきっかけで、マサチューセッツ工科大学（MIT）と慶応大学の学生達が田根地区を訪れたことに始まります。教授の指導のもと、学生たち主体で町並みや建造物、集落について研究をされ、その研究の成果をフィードバックする形で、地域の活性化を目指す事業に進化しました。

学生の皆さんは、夏休み中などに総勢60名ほどが3、4日間、田根地区に滞在されます。地域の方々のご協力でホームステイしたり、空き家に滞在します。協議会のメンバーが炊き出しや差し入れをすることもありますが、基本的には自炊をしていただき、田根の皆さんは、食材の提供などでサポートし、学生さんたちの滞在を見守っています。

滞在している間、古民家や生活スタイルを体感しながら、過疎化や獣害などの問題に向き合い、それらの対策や集落の活性化策を提案してくれます。これまでに、林業の活性化対策として、地元産のコンパネを使った安価で耐久性の高い建築技術の提案や、ユニークな獣害対策などの提案がありました。

学生さんたちが滞在するという、「外部からの刺激」を地域の方々が受けることで、問題解決に対する意識を高める、その結果、地域が活性化され、問題が緩和される、そういったことを目指しています。そして、さらに地域に魅力があふれ、定住者が増えてくれることまでを目標にしています。

夏の滞在には、バーベキューでおもてなし

当たり前の自然が大きな魅力

まだまだ目標には届きませんが、MITと県内外学生との交流から得られる達成感が大きくなるにつれ、田舎のまちをもっと前向きに捉える気持ちが芽生えてきました。

毎日暮らしている自然環境の素晴らしさを、私達は見慣れ過ぎて、当たり前すぎて、それが大きな魅力なんだということに気づきませんでした。

これは、長浜の各地にも言えますし、日本全国の過疎化問題を抱えている集落にも通じるのではないでしょうか。

海外の大学生が田舎の暮らしに一時的に興味を持ったとしても、学生の活動が集落にメリットをもたらすのだろうか？　という疑問、期待に応えられるような充分な施設も人員もいません。全てが初めての経験です。それでも、興味を持ってくれた学生達の期待に応えようと地元の協議会全体が決意して行動し、7年に渡り学生さんたちと楽しい交流が続いています。

この地域に暮らす人々が地域に自信と誇りを持ち、もっと地域を好きになるように、これからも学生さんたちとの交流を含め、様々な活動を続けていきたいです。

田根の民家で開かれた交流会の様子

地域の自立性を高めるために

湖北にようこそ 2

大野木グラウンドワーク協会 代表 藤田　博さん（米原市大野木）

小さな集落では、地域全体がひとつの大きな家族のようなものです。獣害や災害などのトラブルが発生した時などは、地域の皆さんの協力体制が強くなります。その延長が「グラウンドワーク」という活動です。

私たちは、事業や活動方針を描く時、外部からの援助や予算ありき、にはしたくありませんでした。まずは、常に「地域の自立」をテーマに行動しています。

自分達の地域は自分達の手で活性化させようとする仲間達と、この活動を継続していくために、長年の活動で培った技術や知識を全員で共有できてこそ、本当の地域づくりだと考えています。もちろん、協力してくださる外部の皆さんとも、しっかりと体制を整えて活動をしています。

地域の皆さんと世代を超えた交流

小さな循環社会を目指して

協会を立ち上げてからの活動も7年が経ちました。スタッフの数は50名ほどとなり、地域の公園や山道の草刈りや整備作業、介護の必要な方の送迎、地域の小学校の登下校時のパトロールなどが主な活動内容です。

空き家を利用した食堂も開いています。自立した運営を展開していくために、わずかでもサービスに対する対価を頂き、独自の経営を成立させています。技術や物資や金銭がしっかりと循環するシステムが機能してこそ、その循環が継続力につながると考えています。

集落への移住を希望される方は大歓迎。自立した者同士であれば、世代を問わずいい関係が築けるはずです。若い世代との交流がなければ、どんな理想も継続力になりません。

そして、次の世代につなげる意識を強く持ちながら、新しい価値感や外部からのエネルギーを積極的に受け入れ、変化を受け入れる気持ちを大切にし、これからも様々な事業やイベントの企画、活動に挑戦していきたいと考えています。

中学生が参加した里山体験

里山体験では様々な再発見も

生活環境をデザインする

湖北にようこそ 3

KOKOKU（ココク）代表 佐野　元昭さん（長浜市大路町）

ワークショップ「舟の旅」で竹生島に上陸！

「地元の魅力を次の世代に残したい」と佐野さん。大学を卒業後、ゼネコン、建築とインテリアや家具の設計・販売などの仕事を経て、２００７年、27歳の時に独立開業。「建築＋インテリア」の融合と「施主様らしさ」を意識した建築設計とインテリアデザインをモットーにビジネスを展開する。

３年前、ＫＯＫＯＫＵ（ココク）という団体の体験型ワークショップや文化的なプロジェクトに参加したことをきっかけに、湖北の魅力について考えるようになった。「この団体は20～30才代の若いメンバーで構成されています。湖北出身者に限らず、湖北に興味を持った、多様な視点と価値感を持つメンバーが参加しています。東京や大阪、名古屋在住者もいます」と佐野さん。

地元を出てはじめて気がつく魅力があり、この活動を通じてメンバーが情報交換を深め、お互いの想いを高めあい、様々な企画やプロジェクトを展開中だという。

湖北のおいしいごはんのつくり方＠長浜市高月町

「消しゴムハンコ」づくりの様子＠あふみ舎

ワークショップ会場に時々利用する大通寺表参道沿いの「あふみ舎」

多彩なプログラムの「コホクキャンパス」

湖北に暮らす人々が、これまで以上に湖北への誇りと愛着を持ち、楽しく、暮らしやすい「生活環境をデザインする」ことが目標。地域資源を再発見し、調査・分析して、「人と人」、「人とまち」、「まちとまち」のコミュニケーションのあり方を再提案したい。その一つの形が「コホクキャンパス」の活動となった。

最近では、「菅浦と竹生島をつなぐ舟の旅」や「ふゆやまスノーハイキング」などのフィールドワークを実施した。湖北では見慣れた風景、当たり前の自然を改めて見つめ直し、その魅力を発信している。

また、主要メンバーで定期的にスカイプによる会議を実施。どこにいても、ネットを通じて議論を進めることができるようにしている。個人的負担を増やすことなく、細く長く、楽しく活動を継続できるよう、会員のケアをするのも佐野さんの今の役割でもある。

コホクキャンパス＃14「こほくのふゆやまスノーハイキング」で絶景に感動

「舟の旅」竹生島からの帰りにて

奥に見えるのが菅浦。舟上から見る湖北の紅葉も見事

湖北への愛着を形に

今後は、春に山本山のハイキングとサイクリング、夏はカヤックでのびわ湖めぐり、秋は漁船で奥びわ湖の周遊などのイベントを「コホクキャンパス」のシリーズとして予定している。

さらに、「ＡＦＵＭＩ～湖北に暮らす～」というＷＥＢサイトを開設し「あそぶ」「あつまる」「であう」などのテーマで湖北の暮らしの情報発信。

若い世代の感性と行動力で湖北の魅力にフォーカスし、今、何をすべきかをメンバー全員で協議しながら、プロジェクトや事業をスマートに進めている。

「移住者の方々の参加も大歓迎です。一緒に湖北を楽しみましょう」

コラム　多彩な支援策で市民活動を応援！

ココクの活動に参加している皆さんは、それぞれ仕事を持ち、活動にはほぼボランティアで取り組んでいる。

こういった若者主体の団体をはじめ、湖北で活躍している様々な地域団体、NPO、任意団体は、湖北が好きで、湖北のこれからをよくしていきたい、今住んでいるまちを素敵にしたい・・・など、熱い情熱が原動力となっている場合が多い。

しかし、どんなに楽しくても、本職をおろそかにしてはいけない、家族を犠牲にすることもダメ、ボランティアで活動しているとしても、個人の活動の時間と労力にはしばしば、対価としてお金が必要なこともある。

そんな時、行政機関等の支援策が充実しているかどうかがキーポイント。その活動に、より熱い情熱をもたらすことができるのか、より良い活動に結びつけることができるのか。さて、湖北はどうか。

ココクの活動で言うと、長浜市の市民協働活動支援事業などの助成金を受けて、市の職員さんや地域住民の方々、賛同してくれるメンバーに支えられていることも、活動を継続できる大きな要因。

そのほか、国や滋賀県、米原市でも、多彩な支援事業を用意している。内容は年度ごとに変わるので、市民活動について興味がある場合は、支援事業を一覧で見ることができるサイトのチェックをぜひお勧めしたい。

例えば長浜市は、「市民活動団体等助成金情報」http://www.city.nagahama.shiga.jp/に掲載されている。

湖北での活動の輪を広げ、自身の生活をより豊かなものにするためにも、助成金などの支援策を上手に活用し、積極的にまちの活動に参加してほしい。

湖北スケッチ

地域資源としての茅葺き民家の活用に向けて

滋賀県立大学
人間文化学部
濱崎　一志 教授

茅刈りイベント参加者とパチリ

伊吹山３合目付近で茅の刈り取り

滋賀県湖北には、余呉型や大浦型など地域独特の民家が数多く残っている。こうした伝統的民家の屋根は、そのほとんどがトタンや鋼板で覆われているが、もともとヨシやススキを葺いた茅葺きの屋根であった。今、こうした茅葺きの屋根が危機に瀕している。

茅葺き職人の減少、茅場の消滅、葺き替え費用の高騰、「結い」の衰退などがその大きな要因である。

「結い」とは地域社会の小さな集団の中で、労働力を対等に交換しあって田植え、稲刈りなど農の営みや住居など生活の営みを維持していくために共同作業を行うこと、もしくはそのための相互扶助組織のことをいう。労力、資材、資金の貸し借りを行う、地縁にもとづく「近所付き合い」であった。「結い」が機能していた時は村人が少数の茅葺き職人の手伝いとして働き、葺き替え費用を軽減することができた。今は職人が茅の裁断、運搬、葺き替えなどすべての作業を行うため、費用の高騰を招いている。

筆者の研究室の学生は、滋賀県立大学の「近江楽座※」の助成を受け、茅の刈り取り、茅葺き屋根の葺き替え体験イベントを毎年開催し、茅葺き屋根の維持管理に必要な一連の作業の体験を通して、茅葺き職人のもつ高度な技術ではなく、「結い」の一員として茅葺き屋根の伝承に必要な体験を積んでいる。

茅葺き屋根を維持していくには、「結い」の復活が大きな課題であるが、少子・高齢化が急速に進む湖北においては、地域社会の中で「結い」を再構築することは困難である。学生やボランティアを含む新しい「結い」の構築が喫緊の課題である。

同時に、伝統的な民家を地域資源ととらえ、地域の活性化に資する方法を確立することが、地域社会と伝統的民家を持続可能な形で次代に伝えていく上で不可欠なものと考えている。

屋根の維持管理が足を引っ張り、太い梁と柱で組み上げられた古民家が解体されていく事態を少しでも食い止めていきたい。学生たちの活動が、その一助になればと願っている。

長浜市余呉町上丹生で開かれた「古民家再生塾」

※近江楽座とは……大学の総合力、教員の専門性、学生の行動力を源に、地域活性化への貢献を通して地域社会へ根付いていくプロジェクトを募集し、採択されたプロジェクトに対して調査、研究、活動等経費を助成する制度。

長浜に根付かせたい学生たちの活動

長浜バイオ大学
バイオサイエンス学部
松島　三兒 教授

小学校での体験教室

長浜街なかの北国街道沿いに建つ「町家キャンパス」

私自身は実のところ、２００７年に現在の職を得るまで長浜とは縁もゆかりもなかった。当初は知っている人もおらず、大学とアパートを往復するだけの寂しい単身赴任生活であった。ところが、ひょんなことから「キャリア教育」を担当することとなり、商工会議所を通じて街の方々と接点ができ、あっと言う間にネットワークが広がっていった。知り合いが増えれば増えるほど、長浜という地域に対する興味もどんどん増していった。人とのつながりが、その地域への関心を高めるのである。

さて本学では、キャリア科目の一環として、２０１０年度に「長浜まちづくり魅力発見発信プロジェクト」を開講、さらに２０１２年４月から、北国街道沿いの町家を借りて「町家キャンパス」として使わせていただき、学生たちがいつでも地域と関わる活動ができるようサポートしている。学生たちにぜひ長浜で知り合いを増やし、地域への関心をさらに高めていってほしいと、自身の経験から考えたからである。

学生たちは現在、地元の曳山祭りやゆかたまつりなどへの参加に加え、小学校等での科学者体験教室などに参加し、地域の方々とのつながりを深めている。並行して、いくつかの自主活動も生まれた。そのひとつが「Entrance to Science（科学への入口）」である。地域の方々を招いたり、または活動に参加してもらいながら、学生たちが簡単な科学実験やクイズなどを披露し、身近な科学の楽しさを地域の人たちに知ってもらうためのイベントである。町家キャンパスを会場に、不定期で開いている。

こうした活動を通じて、地域の方々に名前で呼んでもらえる学生も増えてきた。

今後はさらに、自分たちの専門も生かせる形で、地域の皆さんと共に、地域の活性化に貢献してくれればと願っている。そして将来、長浜を終の棲家と定める学生が出てきてくれれば、これに勝る喜びはない。

長浜街なかの祭りに出店

田舎暮らしを応援

情報を得る 暮らし体験をする

□田舎暮らしフェスタ

「移り住むなら滋賀県・湖北」を合言葉に、毎年秋に湖北各地で「田舎暮らしフェスタ」を開催しています。しごとセミナー、体験プログラム、地域紹介のブース出展など、田舎暮らしを応援する多彩な催しです。

□田舎暮らし体験イベント

地域づくり団体と協力し、田舎暮らし体験イベントを不定期で開催しています。これまでに、茶摘み体験や古民家再生塾、古民家ライブなどを開きました。地元の人たちと交流することで、湖北の隠れた良さにふれることができます。

□田舎暮らし体験住宅

木之本の町家暮らし「寺吉」と杉野川ふるさとの家「さきち」という田舎暮らし体験住宅を設けています。「寺吉」は北国街道沿いに建つ築80年の町家、「さきち」は囲炉裏を囲んで山里の暮らしを味わう築150年の茅葺き民家。田舎暮らしや湖北への移住をお考えの方なら、どなたでもご利用いただけます。利用のお問い合わせ、お申し込みはいざない湖北定住センターへ。

寺吉

さきち

仕事を見つける

□農業にチャレンジ

湖北で農業を始める場合、まずは大規模農業法人などで働き、農業の知識や技術を習得することが近道です。有機野菜の栽培などに取り組む場合も、地元の農家などから指導を受けるのが最適です。新規就農の相談などは下記へ。

- 湖北農業農村振興事務所農産普及課　tel.0749-65-6613
  http:// /www.pref.shiga.lg.jp/nagahama-pbo/nogyo/
- 長浜市役所産業経済部農政課　tel.0749-65-6522
  http:// www.city.nagahama.shiga.jp/
- 米原市役所経済環境部農林振興課　tel.0749-58-2228
  http:// www.city.maibara.lg.jp/

□お店の経営や製造業にチャレンジ

新しくお店を開きたい人、製造業を始めたい人には、地元の商工会議所、商工会が空き店舗などを紹介しています。後継者がいないため、歴史のある名店が店じまいしたり、工場をたたんだりするケースも。空き店舗の情報などは下記へ。

- 長浜商工会議所　tel.0749-62-2500　http:// www.nagahama.or.jp/
- 米原市商工会　tel.0749-52-0632　http:// maibara.net/
- 長浜北商工会　tel.0749-82-5051
- 長浜浅井商工会(びわ・虎姫・湖北を含む)　tel.0749-74-0194

住まいを見つける

□空き家の紹介(空き家バンク制度)

空き家を求める人と、空き家を所有する人や地元の人たちをつなぐために、いざない湖北定住センターでは、「空き家バンク」を開設しています。利用会員にご登録いただくと、年に数回「空き家だより」を送付。ご要望に応じて空き家の見学、所有者や地元の方々との話し合いなどを調整します。利用会員の年会費は1,000円です。

□空き地の紹介

空き地を移住者の宅地として再活用し、地元に住む人たちと移住希望者がコミュニティを活性化させる「地域と共生する住まいづくり」に取り組んでいます。長浜市と米原市にモデル地区を設けています。

相談窓口一覧

□行政機関	滋賀県総務部市町振興課	tel. 077-528-3231	✉ bh00@pref.shiga.lg.jp
	長浜市企画部市民協働推進課	tel. 0749-65-8722	✉ kyoudou@city.nagahama.lg.jp
	長浜市北部振興局地域振興課	tel. 0749-82-5900	✉ hokubu-chiiki@city.nagahama.lg.jp
	米原市政策調整課水源の里振興担当	tel.0749-58-1121	✉ suigen@city.maibara.lg.jp
□移住相談	いざない湖北定住センター	tel. 0749-50-1019	✉ cohok-style@leto.eonet.ne.jp
	結びめ(湖西)	tel. 090-5014-1600	✉ info@musubime.tv
	湖東地域定住支援ネットワーク	tel. 0749-26-5750	✉ cotohnet@gmail.com

コラム 湖北の住みよさポイント

便利な田舎　ＪＲが琵琶湖のまわりを走り、高速道路が通っているので、都会へ行くのも、湖北のなかで移動するのも便利。スーパーや銀行、郵便局などの日常の施設も身近に。

快適な田舎　下水道の普及率はほぼ100%、住宅の床面積も広く、快適な田舎暮らしが楽しめます。

安心の田舎　保育所や幼稚園など、子どもを育てる環境は全国平均を上回ります。老人福祉施設も充実し、子どもから高齢者まで、安心して暮らせます。

湖北の住みよさデータ

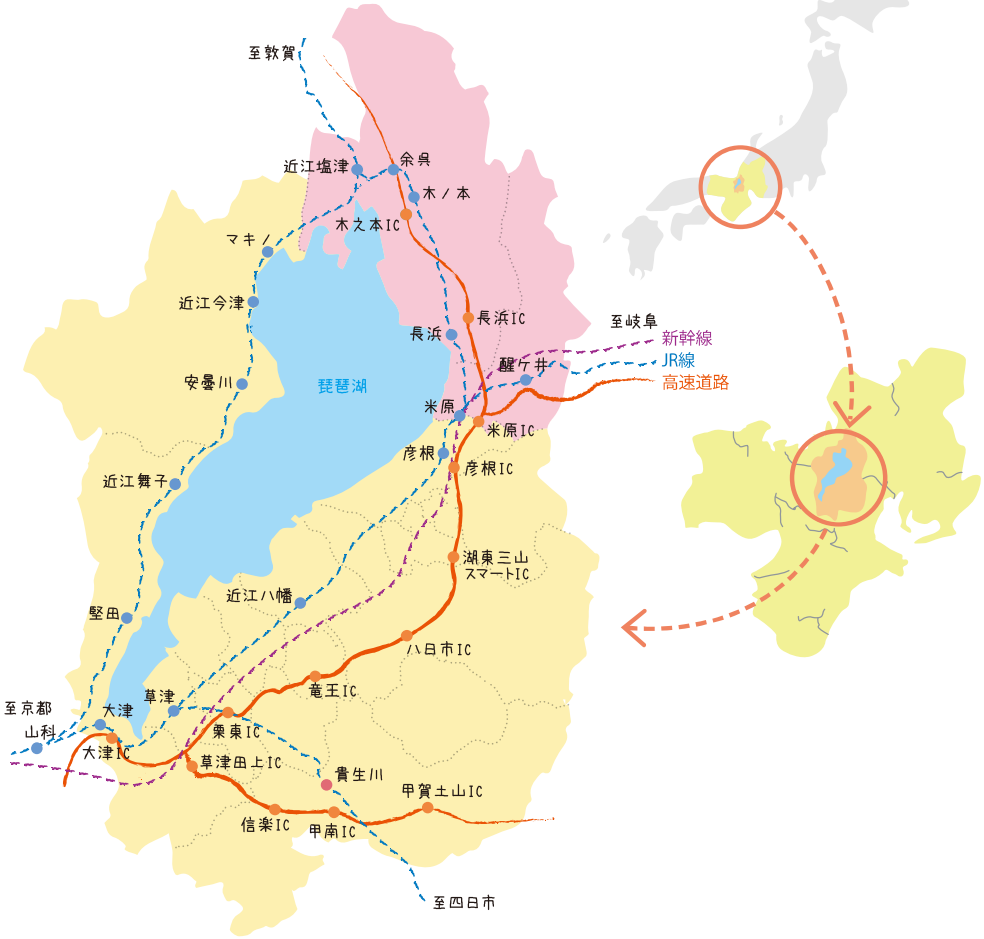
項目		全国	滋賀県	湖北
買物	小売業年間販売額（人口１人当たり）	899,391 円	854,414 円	863,783 円
環境	公共下水道普及率・合併浄化槽普及率	87.6%	98.2%	99.9%
住まい	住宅延べ床面積（世帯当たり）	94 ㎡	117 ㎡	146 ㎡
子ども	保育所・幼稚園数（対象幼児１千人当たり）	4.7 カ所	4.9 カ所	4.9 カ所
老後	老人福祉施設等定員数（65 歳以上人口１千人当たり）	49.1 人	50.5 人	77.6 人

編集後記

編集に際し私たちが気を付けたことは、観光ガイドブックではないこと、生活に必要な情報をお伝えできるもの、読み物としても面白いもの――、でした。移住された方々に会い、湖北の自然を歩き、私たちはますます湖北が好きになりました。この冊子が、移住希望者のテキストとして、すでに湖北に暮らす方には、さらに湖北を好きになる再発見の書として、なんとなく手に取った方にも何か発見がある、そんな読後感を与えられたとしたら、これほど嬉しいことはありません！ 最後に、取材にご協力いただいた皆さま、湖北の魅力をお伝えできる機会を与えていただいた滋賀県の担当者様、心より感謝申し上げます。

My 湖北スタイル編集室 一同

湖北へのアクセス



新幹線・電車利用の場合

- 東京・名古屋方面から
  東京駅～米原駅（新幹線ひかり）約2時間15分
  名古屋駅～米原駅（新幹線ひかり）約30分
- 大阪・京都方面から
  大阪駅～米原駅（新快速）1時間25分
  京都駅～米原駅（新快速）55分
  京都駅～近江塩津駅（新快速）約1時間15分

車利用の場合

- 東京・名古屋方面から（東名・名神高速道路）
  東京I.C.～米原I.C.（約410km）約4時間30分
  一宮I.C.～米原I.C.（約50km）約40分
- 大阪方面から（名神高速道路）
  吹田I.C.～米原I.C.（約110km）約1時間20分
- 米原から長浜・木之本（北陸自動車道）
  米原I.C.～長浜I.C.（約9km）約10分
  長浜I.C.～木之本I.C.（約14km）約10分